

伊庭想太郎編(2)

伊庭道場

剣術「心形刀流」を伝える伊庭道場は、江戸・下谷和泉橋通に門を構えていた。門弟1000人余、江戸四大道場のひとつに数えられた。ちなみに、他の三大道場は千葉周作の玄武館、斎藤弥九郎の練兵館、桃井春蔵の士学館である。

和泉橋通は、今の地名で台東区上野5丁目辺りだ。榎本武揚の生家は同じ下谷で、今の同区小島1丁目にあった。直線で1キロも離れていないから、若い頃の武揚もこの道場に通っていたかもしれない。

伊庭想太郎、幼名亥朔は嘉永4年(1851)10月、同道場8代当主の軍兵衛秀業ひでなりの四男として生まれた。幼少期から、父のもとで厳しい剣術の稽古に明け暮れていたことだろう。

厳格な「心形刀流」

江戸初期に創始された心形刀流は、その名の通り、剣の形とともに心のあり方も重視する流派だった。長く続いた泰平の世にあって、当時の旗本、御家人たちの華美奢侈の風を排した。その古風な厳格さが老中首座水野忠邦の目に止まり、天保の幕政改革の際、秀業は幕府に取り立てられ、留守居与力の役職に就いている。

しかし、忠邦の失脚で秀業も隠居することになり、その跡を高弟のひとりが継いで、9代秀俊を名乗った。一子相伝とはせず、技量の高い門弟を選んで継承させ、家督も相続させる慣わしによるもので、そのせいで、伊庭家の家系はいささかややこしい。

秀業の子どもたちは秀俊の養子となった。四男一女の、その末弟が想太郎である。次兄、三兄はさらに他家の養子に出て、伊庭道場の御曹司として世間の注目を浴びることになるのは、長兄八郎ひできと(本名・秀穎)だった。

さっそうと、飛鳥の如し

弘化元年(1844)生まれだから、想太郎より7歳上だ。今残る写真を見ても眉目秀麗の男前だ。やや小柄だったものの、剣術の技量は「伊庭の小天狗」とうたわれるほどの腕前だった。

幕臣きっての剣客、山岡鉄舟を相手にしての、鮮やかな仕合が伝えられている。「鬼鉄」の異名のあ

長兄は「小天狗」八郎



伊庭八郎の肖像画
(函館市立函館博物館蔵)

る鉄舟は、鋭い諸手突きで知られた。敵なしの評判にはやされて、八郎と手合わせすることになった。

「堂々たる構え、鋭い気合が道場を圧した」と、後に伝え聞いたその模様を記しているのは、明治・大正期の海軍軍人小笠原長生である。この人物については後述する。

「やがて機熟したりと見て鉄舟は気合もろとも得意の諸手突きを試みた。すると八郎の体は飛鳥の如く眼にも止まらぬ早業で交わされたので、鉄舟の竹刀は道場の羽目板をグサと突き刺した。(略)八郎はニコリとしたばかりで、別に驚いた風もみせなかった」=小笠原長生『伊庭の兄弟』

自らは竹刀を振るうこともなく、さっそうとした美剣士ぶりが目に見えるようではないか。やがて幕末維新の激動に身を投じ、榎本武揚軍に従った箱館戦争で奮戦、24歳の若い命を果てた。

想太郎にとっては、あこがれの存在だった。後年、想太郎は居宅奥の一室に八郎の遺影を掲げ、日々の拝礼を欠かさなかったという。